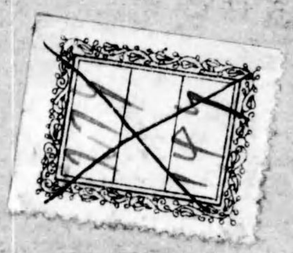

特106
663

詩歌叢書第四編

日没

米田雄郎

此一巻を
亡き師僧の靈前に
ささぐ

遺弟　雄　還

序にかへて

大和にて米田君。

八月の初めとはいへ、大和にはもう秋風が木の梢、草の葉にそれとなく朝夕は吹きそめて居ることとおもひます。東京の郊外でもうかなかながきかれるやうになりました。あのかなかなの聲をふと、曉の空や夕べの竹籔などにききいでたとき、私はそれがまだ夏のもなかであつても秋を感ずるのです。そして、かなかなは私をして遠

い遠い未知の心の故郷にまであこがれしめるのです。

私はよく毎日のやうに子供と二人、大久保の村社に行つて、涼しい午後をおくることにしてゐます。この村社の境内は可成り廣く、空の方にずつと梢をのばしてゐる大公孫樹の木立があります。その木蔭の捨石の上にいつも私は腰をおろして、子供と話をしたり、時には讀書をしたり、物を考へたりしてゐます。そして、君の歌集の校正も此冷たい捨石の上に全部しました。良寛の歌集をも此頃此捨石の上で讀みました。

良寛の歌集をよんだあとで君の歌集の校正をしながら、自分はいろ〳〵と物を思はせられました。君と良寛とどこかにその歌の姿に

似てゐるところがあり、君の生活の一部が良寛の生活と似てゐるところがあります。彼の「飯乞ふとわが來しかども春の野に菫つみつつ時をへにけり」と同じやうな君の生活、君の趣味性を見出でて少なからずなつかしくおもひました。君の歌には自然のきよらなるひびき、しづかなる色、なつかしき匂ひがいたるところに流れてゐます。いかにも自然の心にかへるといふやうな、亦素直に自然のなかにいきづいてゐるといふやうなところがあります。若し君をして先年上京したまま、都會の生活をおくらしめたならば或はかういふ姿は君の歌に示現せられなかつたかも知れぬ。大正二年の作の「杏の赤さ」の上京中の作より、君が大和の僧院に歸つてからの作に移る

と殆んど別人の觀があります。そこには自然のきよらかな色と響と匂ひとのなかに、初めて素朴な本然の姿にかへつて、新しく自己にめざめた君を見出づることが出來ます。それ以來君の歌は益々澄んで來た。それは秋がきて水が自然に澄んで行くやうに、大空がはるかに青く霽れて、その色をふかめて行くやうに――

大和にて米田君。

君が大和の山深く一小廬を結んで草や木と同じやうな生活をしてゐるといふことをおもふと、私などは都會の生活がいつも厭はしくならずにはゐられない。都會の生活が厭はしい――といふやうな言葉はよく誰れの口からも言はれるので、甚だ獨自性の乏しい言葉で

あるが、私は此頃つくづくと自分が都會生活にたへえられぬといふことを知り悉した。私のやうに社會との接觸、時代との接觸、人間との接觸をうるさがる者にとつては都會生活は時に殆んどたへられぬことがある。矢張り生れた村落にかへつて、生れた村の土を耕してゐた方が自然であるやうに思はれてきた。然しそれは今の處思はれてきたといふのに止つてゐて實行はとても許されぬ。それを思ふと、君は餘りに早く、自然のふところに歸つて行つたかのやうにさへ時には思はれる。もつといろんな人生の波をくぐりくぐつたはてに歸つて行つたならば、猶そこに今とは異つたものが君の心に根ざして來たこととおもひます。然しながら、人間はいつでも行くべき

ところへ行かれるものではない、行きたいとおもふ時には却て行かれないものだ。山の彼方の空遠く棲む幸ひを眼に描き心に描いてゐても脚は固い地にくつついてゐる。君が大和の山ふかく歸つて、そこに本然的生活をはじめたといふことの早きに失したと、何の理由をもつていふことが出來やう。感情の硬化せぬ若い日に歸つた君は、よりよく自然のなかふかく喰入つて行くことが出來たに違ひない。

大和にて米田君。

君の歌集「日沒」が市に出る時、必らずや君の歌に一種の驚きと喜びとを喚びさまされる人の多いことを私は信ずる。何となれば君の歌は現代に於て稀にみる特異な姿をもつてゐるからです。

大和の山ふかく、其處には君の本然的な生活がある。——私は、君が灯(あかし)を流す深い谷の水、雪竹の割れる竹籔、君が飯乞ひに行くといふ寒村、里はづれの畑の七阪、鶉のとほねのする片照りの山、君が山の秋草をわけて行く麻衣姿、草庵、鉦の音、風の音、木立、空の色などをそれからそれへと心に描き眼にみ、耳にきくの感があります。君の歌集の讀者も亦自分と同じくこれらのものを視、聽き感ずることが出來るであらうと思ふと、喜びは決して君一人のものでないといふことを深く感ずるのです。

大正六年八月上浣

黎明の蜩をききつつ東京の郊外にて

前田夕暮

日沒目次

片照りの山……一
麻衣……三一
入日の前……七三
杏の赤さ……一二一

序にかへて（書簡）……前田夕暮
表紙畫……名島彌三郎

片照りの山

大正六年作

片照りの山

片照りの山に百合の根ほりにけり鶉のとほね
かそかなるかも

白々と皮をはぎたる杉丸太(まるた)かつぐ男にあひに
けるかも

みなれたる一本松のさむざむと今日も時雨に
ぬれにけるかも

一すぢに落つる筧をきゝあればこゝろ静かに
極まりにけり

わが庵のかきねつゞきにほの白く返り咲くな
り山梨の花

山ずみの心やすらにさつま芋ゐろりに焼きて
食うべけるかも

雪ふかきとほ山の端に見えそめし空の青さの
なつかしきかな

青き菜の少し見ゆるはつめたかり満目しろき
雪の畠に

さくさくと雪の山路ふみのぼり仔兎の餌の青草さがす

雪おもくつもれる下をかいくゞりもらひ湯にゆくわが妻あはれ

あかねさす雪の朝(あした)のしづけさに椿を手折るわがはしき妻

雪ふかき夜

ゐろりべに足さしのべて雪ふかき夜を青竹の割るる音きくも

雪深き夜を青竹の割るる音しきりに近く身にひゞきけり

さ夜ふかくゐろりかこみてはなひける現世人
をかなしみにけり

さ夜ふけて錢をかぞふる音寒しいたく悲しき
心にふれつ

きえのこる片山かげの雪ふめばさくさくとし
て心かなしも

雪おもく竹たれさがる寂しさよい行くとわれ
は頭さげにけり

雪おもく竹につもりてたれかゝり冷たき笹は
頭にさわる

青麥は雪きえそめし畑の面にいささか見えて
冷たかりけり

冬の日のうすらに照らす竹やぶに村雀なくたそがれ近く

雪ふかき庵にこもりてゐろりべにやすき心に飯を食むかも

朝はやみ妻がくりやにためつぼの氷打ち破る音つめたかり

一握の米

一握の米をうけつつありがたくおしいたゞきて涙ながすも

きり白く山にかゝればその山になく山鳩のありてきこゆも

鴉一羽なきつかなしく飛びめぐる朝しもうすき青豆畠

さわ〳〵とうら竹やぶに風なりて心さみしき夜にてあるかも

夕ぐれの空には月のほそくてりやぶはしづかにうちゆれゐたり

ちろちろと落つる筧の音寒み妻はゆふげの米洗ふなり

色あかき小がにしづかに動く見ゆ水そこふかき淵の岩間に

月すめる夜ふけの山を越えゆけば身はひえわたり心かなしも

草の芽

わが通ふ山坂のべに芽ぶきたる草の青みに置
ける朝露

朝早く里にいで立つ坂路の路のべにさくむら
さきすみれ

谷の間の杉皮小舍の屋根にきて小雨の中にな
けり山鳩

くれ時の片山にてる陽をうけつ柴たばね居り
山少女ども

日くれ時三つ葉をつむとやぶかげにあゆめる
妻の素足しろしも

雨あがり三つ葉をつむと出でゆきて笹葉のつゆに裾ぬらす妻

柴部屋の戸まへの砂のもりあがりつくし出でしをよろこべり妻

わが妻はあさけの雨にぬれにつつ仔兎の餌の若草つむも

ひな鶏を放ちて吾れも日おもてに遊びて居ればゆ心やすしも

芽は少し見えてさみしき草中に妻はよもぎをつむとさがすも

白々と皮をはがれし杉丸太積めるひたびにめぶく青草

白々と皮をはぎたる杉丸太まろびて寂しゆふべ峡に

わらくづをしきて村童と遊ぶなり納屋の戸まへの日おもてに吾

あたゝかき日なれば愛しき小むすめは山に薪をたばねゐるかも

虎杖

ちろちろと落つる筧の音たかみ小夜はふけけり歯痛し吾れは

さ夜ふけて落つる筧の水たかしなくになかれず歯痛し吾れは

日てりよき土手の虎杖童子らとたのしく取り
てわれは遊ぶも

雨あがり土手に虎杖さがしつつ山鳩なくをき
きにけるかも

尼講らと三十三所の御詠歌をわれはとなへて
心やすしも

あたゝかき春の一夜は尼講らにまじりてわれ
の唱ふ御詠歌

み佛にたてまつらんと山をゆきしきみの花を
手折り來しかも

月かげは吾れの寢部屋にさしそひてうら竹や
ぶのゆらぎきこゆも

仰ぎ見る月てる山の木々の葉のさやぎしづかにながるる夜風

小夜ふけて畑の七坂こえくれば松風の音しづかなりけり（畑の七坂はわが里はづれの山阪なり）

かへりての安寝思へばけはしかる夜の七坂もやすくこゆるか

山ざくら

杉山の中にまじりて山ざくら一樹ま白にかすみけるかも

しづかなる朝の山路をさみしみつゆきて衣の裾ぬらしけり

ちろちろと水わき出づる砂の上にちひさにさけり水草の花

なもしらぬ小鳥微妙になきわたる深山路にさくしやくなぎの花

小さなる頰白のたまごのあたゝかさ掌に感じつつさみしみにけり

山吹の花のむれさく枝かげに頰白のたまごをわれはにぎるも

雨あがりうらの空地にむらがりてはこべは白き花つけにけり

吾がために米を施すをとめごの垂髪にさす白げんげ花

白藤のたれさく下を通りてはこゝろさみしく
花に手ふるる

吾が庵の青杉垣にからみさくむらさきの藤は
今盛りなり

生垣の若葉を食める曳き馬の金具の音のなる
ねさみしも

五月一日朝あけわが兒圓生生る

生れたるわが兒のなける聲きこゆ朝けの谷に
水くみ居れば

おのが兒の顔をしみじみながめつつあかざり
にけり父なるものを

やすらかにねむれる吾兒の寢息をばこゝろさ
みしくうかがふわれは

兒がために目ざめがちなる小夜ふけにきく松
風はさみしかりけり

乳の香のにほふ小さき兒の下着陽あたりのよ
き木の枝にほす

うす暗き土間にちしや菜をわれは撰る產屋に
妻はこもりてあれば

ひつそりとうらやぶ蔭に乳汁すつる病ひあが
りの妻はさみしも

細りたる妻は產屋の戸に立ちてながめてゐた
りしらふぢの花

麻

衣

大正五年作

冬山

茶畠のしもよけ蔦に霜白く日の輝やけばまぶしかりけり

しづやかに日ののぼりゆく音すなり谷間の樹立さ青なるかな

夕くらき流れに添ひし細道をかへるわが頰を
うつしぐれかな

山峡の部落に野火のほあかりがわづかに見え
て寂しゆふぐれ

夜空低うたれて暗かり葬ひのわがたゝく鉦山
にひゞくも

わが寺のゆふべの鐘のなりひゞく寂しさに默
し落葉をひろふ

冬山をこえてゆふぐれいそぐなりわが僧院の
かねききながら

樹にのぼり漆かくひとうすれ日は片照れりけ
り野分しつつも

日没

日没のわが勤行のたゝく鉦ひとすぢひゞきさ
びし冬山

日没の餘光をあびて一群れの小鳥ぞ山にあつ
まるあはれ

うち默し冬枯れ野原さまよへるゆふべは寂し
飛び立つきゞす

薄氷をふみつゝひとり明けちかく別れてかへ
る山路の落葉

さぎり立つ谷にくだりて顔洗ふ流れにそひて
椿赤しも

灯をながし深き谷間をのぞきたるこゝろ靜寂(しじま)
のなかに澄めるも

小夜ふかく窓をひらきて灯をながすましたの
谷に水の音すも

ひとりなればおとづれにける我妹子にほころ
びなどを縫はしけるかも

山畑

くみおきの水も凍りて悲しかりひとり朝餉の
米をとぐかな

春の山日光(ひかり)こまかき雨晴れの青き菜畠に菜を
つむ少女

あたゝかき日なればひとり山畑に春草花の種
まきにけり

藥草をえらびてをとめ家いでず寂しき日なり
野にみぞれする

かへしたる君は二の山越ゆるらむ明けちかづ
きて小ゆき降り初(そ)む

あはむとて夕かたみぞれする山をこゆるこの
身は歎かれもすれ

うす青き小草芽ぶけり山すその日おもて路を
君とあゆむも

石破(わ)りの男のむれに吾れもゐてダイナマイト
の口火を見入る

青空へあまりしづかに口火よりけむりのぼる
に寂しくなりぬ

もらひ湯に家をいでゆく寂しさよ月はくまな
く山路を照らす

十方世界春日あまねく照りわたり白木蓮の花
ひらきけり

日あたりのこぼれ松葉の上にほす吾が坐蒲團
のほかほかとして

眼かくしを取りていかにもかなしげな顔して
村童(わらべ)空をあふぐも(鬼ごとをせる童子を見て)

西方の空と山とのあひだより射す日をうけて
人樹をきれる

つゝましくものめづらかにいたどりをかみて
笑へり愛しき我妹子

ゆふぐれをひとり厨に夕支度すれば女人(にょにん)のか
なしみをすも

うるしなす髪をなでであげさみしげにかるく笑
へりこの若人は(昇一夫に)

青大空

谷ゆけばしいんとこゝろはすきとほり青大空
は吾がまうへなり

青々と一めん樹々は萠えいでゝ朝は山鳩雉子
なく五月

わが庵の戸をばたゝきてこの朝けわらび取り
にとさそふ童女ら

ひそひそと大根の花に降りそゝぐ雨にみいり
てありしわが身かも

もらひ湯に山路下りて山藤の垂花の下をすぎ
にけるかも

月夜よしたからに空の澄みたればあけはなち
たるまゝにねむるも

くみおきの水にうつれる月のかげおぼろなり
けり春の夜はふかし

桃山の養蜂園にゆきましぬかよわなる身をい
たはりたもれ（ある少女に）

淡路羈旅の歌

船着きの濱にゐならぶ人夫らの顔はかなしと
わが嘆くかも

ほの白み鳴門みかんの散る下に白きくだかけ
なきゐたり、朝

水禽はま白に群れて浮きゐたり五月日ながの
汐川口に

日はかげり五月のそらの下にして帆をまく船
を見るはさみしも

廓うらの濱に章魚壺ころげあり壺のかたへの
いそぐさあはれ

現身の旅の寂しきこゝろより濱にくらげをふ
みにじるかも

波の上ゆ鵜なくさへ現身はさみしと云ふかか
なしと云ふか

海がらす一羽飛びきて波の上の岩の尖りにな
くがかなしも

海魚の青くおよげるそさまを山にかへりて母
にまうさむ

海魚の生きておよぐを見たりけり岩と岩との
青ずむそこに

夜泊りの船いならびて帆をまけり沖よりはか
か入日するなり

ほととぎす

ほととぎす眞上の森になけるより仰げば青に
空はすめるも

門さしてひとりこもれば鳴きすぐるほととぎ
すあり月のさし入る

わが庵のめぐりの谷にほそほそと濡れてを立
てり若竹あはれ

まつすぐに深き谷より若竹の幹濡れ立てりこ
こちよき朝

君がためものの干し竿を切らんとてすぐなる竹
をやぶに撰ぶも

朝明けを樹の下つゆにぬらしたりわがなつかしき黒麻衣

身にまとふわが麻衣ぬらしけり山路の草のつゆのしげきに

朝菜つむと君はつゆ草ふみ分けて山すそ路を下りゆくかも

みそはぎの花

大粒の雨ふりそゝぐ盆すぎの庭にさきけりみそはぎの花

朝ぎりの流るる峡に少女ひとり茄子(なすび)の花の蟲とれるかも

寂しさに空をみ上げてありけるに鴉山よりな
がれてきたり

施餓鬼會の吾がつく鐘のすみわたり空には雲
の峰のわくかも

かなしげに童女童子は施餓鬼會の鐘つきてけ
り赤き入りつ日

わが寺の屋根に西日の射すさみし施餓鬼供養
は終りけるかも

ま白なる手をのべ君が物あらふ筧の水のそば
のみそはぎ

*

さる年の夏なりしかも友の家にやしなはれし
を思ひ涙す（羽後にありし頃をおもひでて）

かな〳〵のなきて山々夕榮えのすれば葬ひの
鉦なるさみし

つむじ風こぼれ松葉を卷き上げぬ西日照らせ
る味噌部屋の前

*

はつ秋

秋草を分けて山路をくだるさへかくも心は澄
みくるものか

初秋の土なつかしみわが歩む朝足もとの小さ
き白萩

満月はくまなく照れり藁小屋のつゞき寂しく
すゝき穂となる

月の夜の空わたりくる鳥のこゑかなしと君は
いひにけるかも

朝の日になびく穂すすきながめつつ飯を乞は
んと山をこゆるも

秋萩の咲くを寂しみをらんとす身はひとりな
り山路をこゆる

麻衣きればなつかし山萩のわがそでにふれ散
りにけるかも

秋草のつゆにぬれつつ山出づるわが路のべに
散れる山萩

汝が染めし腰衣をばぬらしけり通草とるとて
秋草つゆに

道のべの穂すゞき拔きてかへりくる月夜山路
のしづかなるかな

小夜ふけて夜鴉なくに山へだて盆の踊りの太
鼓のひゞく

ひとりみの寂しさ山に栗のいがむく道のべの
白萩の花

朝まだき彼岸佛に少女子は花さゝげんと持ち
きたりけり

吾がうてる彼岸の鉦のひゞく空すみわたりた
り秋を感ずる

叔父師僧の遷化を悲しみよめる歌

うつそみの悲しさせめて死なぬまの叔父にあはむと走る山路

安らかに手をうち合せ唇舌(しんぜつ)をうごかしたもふに水をまねらす

正念に生命たえたる老僧のいまはに吾れはあひにけるかも

秋の虫なくに涙はまじりけり夜ふけて釘を棺にうつも

以下旅にいでてよめる歌

船大工大鋸(おが)ひきてゐたり海濱のねぎの畠に鴉下りなく

秋の雨濱磯畠の青ねぎにふりそゝぐなり鴉下りなく

ふりそゝぐ秋雨の中をあま少女生魚を手にさげて來たるも

鴉下り青ねぎ立てる濱畑に啼きつつ餌(えさ)をあさりて走る

海草のしげる淺瀨をひき上ぐる船内底に光る小魚ら

磯濱のこんぶほし場に蜑をとめ髪すきゐたり
初秋の海

見わたせば松の樹の間ゆ初秋の水をたゝへて
沼すめるかも

唐辛子赤く實りて燃ゆるなりこゝの峽の秋の
停車場

仔兎の歌

仔兎の餌さにとふぢのつるたぐる寂しさ莢は
さやさや鳴るも

てのひらに小麥をのせて仔兎に食ましてゐた
りさみしわが妻

野分してさつと木の葉を散らしたり仔兎は耳
をたてにけるかも

*

竹やぶに野分のあたるその音をきゝ入りにつ
つ庵にこもるも

山ふかき草のいほりはいと寒し時雨まじりに
木の葉戸を打つ

夜の土間に月のさし入る明るさに里芋をむく
わが妻あはれ

山峡の朝ぎり隱り人をよぶ少女のこゑのしづ
にきこゆも

たちならぶ杉の樹立のこみどりにさくら一本
色そめにける

うす暗き森の木かげの花椿見るおのが身のうら寂しけれ

飯乞ふと里にいでゆくつゝましきこゝろがみあぐ秋の青空

托鉢に行くと山路を下りつつ僧良寛を思ひねしかも

入日の前

大正三年作

青き樹

悲しさは秘めてかたらず落葉しき日向にひと
り默して遊ぶ

うなだれてもの思ひ凭る樫の樹の蔭は暗かり
椿は赤し

太陽は青く杉の林にかゞやきて頰に反射し吾
れ木の實食む

あなあはれ樹によぢのぼり木の實取り食らふ
男の唇赤し

立枯れの野にあかあかと太陽は入らんとすな
り小鳥群れ立つ

枯れ草を燒く火の見えてゆふぐれのさみしき
心が思ふ東京

枯れ草を藉きて悲しみ悔ゆる身をめぐりて啼
くか眞黑きからす

かなしさに心はぬれて日の光りおそれつ谷に
くだりてゆくか

香具山に遠見をすなりをちこちの野火を見ん
とて寂しきゆふべ

遠近(をちこち)の田に焚火して働ける農夫の姿あらはに
見ゆる

野仕事に出でゆく父の姿見てまづ涙をば流す
なりけり

草花に霜よけをせる父の頬に夕焼のして寂し
かりけり

默す父涙する母古き家にランプはつきて悲し
くあるも

谷底をのぞけば青き樹ぞみゆる冷たさに心打
ちふるへたり

濃青なる大根畠あざやかに見えきたるなり淡雪の中

穴堀りの男が煙草のみて居る燒場に影す青き杉の樹（穴堀男）

入日の前

しづやかに輪廻生死の世なりけり春くる空のかすみしてけり

金輪の入日の前に道化者走りいでたり莊嚴なるに

ゆくところ眞實なれば綠なす山あり川ありな
つかしきかも

すこやかにまづ太陽を禮拜す幸福をもてり貧
しきなれど

日の沈めばうす暗き世の隅にゐていぢらしう
われ涙ぐむなり

原に太陽(ひ)のおほきく赤く沈みゆけば濁惡(じよくあく)の身
はもだされもすれ

むちむちと草食み原に乳牛は群れゐたりけり
夕燒するも

くるくると朱面の夕日落ちてゆく原に野少女
草つめになり

*

おどけては手振り足まげ踊るなる子供群れ居
る原に日赤し

日が原に燃ゆるなりけり子供らは一もとの樹
を廻りて踊る

いちやうに踊りをやめて子供らは崖を下れり
夕陽が赤し、

濃青なる樹立の奥に輝きて日はのぼるなりし
づかに呼吸(いき)す

ひるがへる廣き樹の葉に日は射しつ雪の高嶺
の空ににほへる

をんなゐて藥草を畑に堀れりけり時雨雲より
日は照り返す

茜させば雉子は啼きて大屋根の雪ゆるやかにすべり落つるも

ちらちらとだんだん畠の大根の葉に淡雪は降りいでにけり

谷にきてあはれ生きの身息ひそめ沈まんとする太陽を見入るなり

上眼して夜の山腹の火のそよぎ女は不思議に見ほれて立てり

青よどむ淵をのぞける吾がいのちおびえてゐたり生きものなれば

草に伏せば人か獣かわが心わかたざりけり木の實を食めり

氷雨

とぶらひの造花に氷雨降り去りて陽はあかあかと嶺にもゆるも

おほきなる入日目にあり立枯れの原を默してゆけどもゆけども

淋しげに燒骸ひろふひとり身の隱亡(おんぼう)の顏に赤く西日す

物思ひあぐみて煙草すひあへり穴堀り男と草に坐りて

穴堀りつ隱亡しきりに唄うたふ野づらに入日大きく赤し

親と子

親は親子は子としての悲しみに旅出をすなり
あはれならずや

泣きたさを秘めて下男と馬鹿話すれば高嶺に
日は燃ゆるかも

旅などをおもひとゞめてさ庭べに草ひき居れ
ば泣きたくなりぬ

日にむかへる部室に坐りて中風病の叔父うつ
とりと梅に見入れり

一めんに陽は照りわたり中風病の叔父はしき
りに手を振りて居り

寒念佛にいでゝよめる歌

山に沿ひて夕くらき路をいそぎしに氷雨は顔をしたゝか打てり

雪のある山と山とのあひだより月出でにけり淡雪ちるも

氷雨ふる夜の山の端にのぼりたる月おほきかりわれ鉦鳴らす

一握の米をもらひて念佛を申せば夜啼きする鳥のあり

そばだてる山のふもとに立てば頰に涙ぞ下る夜空は暗し

あゆみゆく闇路は暗し鉦鳴らし念佛申すあは
れならずや

鉦たゝき懺悔すなりと夜をいゆくあはれさに
まづ涙してけり

野にて

濁悪の身はもだされて悲しかり入日あまりに
赤く沈めば

赤ぐろき友の農夫の顔に日は射しておほきく
原に沈むも

野をゆきつ燃えいでにける新緑のつよき力を
ひた感じたり

照りかへし照りかへしして赤々と電車走るを
野に見ては立つ

つかれては肥えたる體草になげ家畜のごとく
あはれに呼吸す

野少女は原に落ちゆく焦熱の日に眞向ひて草
つみゐたり

原にゐて子供のやうに唄ふたひ手うちはやせ
ば涙いでたり

眠りたる吾れを童子らとりかこみ道化のまね
をなしゐたりけり

あはれなる夢遊病者が眼ざめたる時にはきたり遊べよ童子

しんじつに生命いたはることもせず死なんともせずあはれ生くるか

黒ずめる一樹はゆれてさわぐなりわがゆく野原暗くつめたし

娼婦

ぞろぞろと娼婦はむれて街ゆくに空たゞれつつ日は燃ゆるなり

つやのなき顔に夕日の照りそひて娼婦笑へば女人(にん)にたがはず

少女

ぽつと頰のほてりおぼえて少女子は身をソフ
アに投げて笑へり

ピンポンに疲れて少女恍惚と外面の花を見入
るなりけり

久々に少女に口をきゝしかば悲しさ胸にこみ
あぐるなり

*

ほてる頰に青葉木漏日かゞやきてしきりにわ
れらかはすさかづき

酔へば唄ほがらにうたふ友ありて青葉のかげ
に交すさかづき

食客(ふそうろう)に似る心をもて吾が母の眉剃りゐるをなが め入るなる

眉剃れる母のかたはらにじつとゐてえにしだの花に見入るなりけり

眼をとづれどとりとめて思ふ事はなし五月山吹あせてちるかな

蜜蜂の唸りをじつと聞き入るに暗き惱みは燃えもゆるかも

吾が前に黒ずみ垂るる幕のありぢつと見入るに呼吸荒みくも

燃え出でし河岸の柳に日沒の餘光のあかく殘るさみしさ

さ夜ふかく

さ夜ふかく默して原をゆきたるにいのちいた
はるこゝろわきくも

しんしんとさ夜深くしてにはとりの高啼きす
るは寂しかりけり

夜深く鳥屋にはとり啼きければ寂しくなり
て母を呼びたり

新しきひのき笠きて雨あがりの畑にさみしく
桑つみをする

しよぼしよぼと雨にうちぬれ夏大根ひけるさ
みしさほととぎすなく

羽後國沼舘の友の家にてよめる歌

ちひさなる山の停車場に石竹の花は眞赤にさきてあるかも

山峽の小驛に汽車のつきし朝微妙に啼ける鳥のありけり

一本の山峽の路を箱馬車は黑く光りて走りゆきけり

眼にうつる曠野は青し太陽は木原に搖れつ沈みゆくなり

*

古き夜の町の小さき旅籠屋に三味のひゝきて灯は入りにけり

古き夜の街をとぼとぼ三味線の音にさそはる
る心寂しも

さびれたる朝の旅籠屋に爪彈の三味しづやか
に鳴れるさびしも

酔ひはてし身體を柵に投げかけてどうにもな
れと思ふなりけり

たれさがる夜の廣葉に指觸れて身ぶるひをし
つ悲しみにけり

*

雨の中うらの小畠の茄子つめる羽後のをとめ
のかなしき小唄

山に日はもえて入るなり羽後女おはぐろ黒き
口あき笑ふ

みじめなる旅僧としてあはれにも一わんの飯
を求むるなりけり

めぐまれし飯を食らひつほろほろと堪へがた
くあはれ涙をこぼす

みちのくに流れきたりて吾が心母よおん身の
幸福を祈る

花とづる松葉ぼたんにながめ入りはるかに母
をおもふなりけり

夕晴れしひぐらし啼くにひとしきりさすらひ
の身の寂しさ感ず

*

青き枝手折りては敷き草原にかつこう啼くを
悲しみてけり

われひとり青葉折りしき丘に居り彼方木の間
の水ひかりする

もゆるごと酒をおもひてわが肌を親しくなで
ぬ朴の木かげに

夏安居(げあんご)の心しみしみこゝにきて無量壽經を讀
みにけるかも

木の實

河原に行く水を見てしみじみと小石をうてば
秋空に鳴る

かんかんと小石をうてば秋空にわれの心も澄
みわたるなれ

秋山に童子うちむれ笑ひつつなんとうまさう
に食み居り木の實

蔓たぐる丘の農夫の大き手よ野は一面に夕日
あかしも

うつむきて草刈りをする農人の大きなる背を
ぢつとみつむも

檜の木笠かぶりつわれも草刈りの群れに交り
て秋山をゆく

この心自からよしと思ふなり秋山にわれは草
を刈るかも

粟畑に案山子を作る農人の顔を夕日はまとも
に照らす

童子らが群れて蜻蛉を取りて居りきつねのか
みそり野に眞赤なり

*

大空はすみ渡りたりわがゆくべき兵舎の屋根
はしろく見ゆるも

尾を振りつ豚は愛(かな)しき眼ひらきてわがかたは
らにあゆみくるかも

豚小舎に入りては豚の背をなでてかなしき父
の顔をながめず

うち默しゆふべ悲しく酒くめる父を子として
見るにたへずも

わが顔を兒としてながめたまふなよかなしき
父よ悲しき母よ

淺草の秋は銀杏の散るならむわれふるさとに
豚番をすも

ぐぐぐぐと啼きつ白豚うす暗き豚舎(とんしゃ)の壁を破
りてゐるも

白豚はかけめぐり居りまんまるき背のみ光れ
り日のふる中に

枯草原

さはやかに大根の葉は輝けり野をゆくに心澄
みわたりきぬ

大股に夕日背にして歩みさる農夫の大き日に
やけし顔

うすあかく秋の夕日の常盤樹に照りて心は靜
まれるかも

高嶺より夕日ひとすぢ光りきて枯草原に小鳥
群れ飛ぶ

いちやうに秋草原は野分せり小鳥わめきて群
れ立ちにけり

杏の赤さ

大正二年作

杏の赤さ

梅雨ぐもる空をねころびてながめ居る眼にう
つるなり杏の赤さ

こゝろよく濃きむらさきの紫蘇の葉のひるが
へるなり郊外の家

色づきし杏の光る寮庭のかげに靴下洗ふ悲しさ

入日あかき街につかれて汗ばめる額ぬぐひぬかなかなの啼く

ゐひざめのからだのだるさ草原に坐りて仰ぐ灰暗の空

色あせてかへり咲くなる山吹をしばしみてあり醉ひざめし眼に

可愛ゆげに小鳥のごとき口あきて眠る女の魂をぬすまむ

ゐひざめて悔いの涙にみつめたるおしろいはげし小をんなの顔

樫の樹々くろくかげひく吾が窓にゆふべ糸張
る蜘蛛はかなしも

ゑひざめの頭の痛さ太陽は黄にかゞやけり草
に坐れば

うなだれて入日の赤き街かへる埃まみれのわ
がすがたかな

香を吐きて闇にいきづく花びらに顔よせけれ
ば心狂ほし

寂しさにおもひいだして指先の酒のしづくに
かく君が名か

さみしげにゆふべとなればよみがへる草かも
吾れの暗きこゝろは（以上上京中の作）

僧院より

うち嘆き空をあふげど日はてらず谷川にわれ
蟹と遊びぬ

びはの花散りぬ靜かに明けてゆく窓の硝子に
うつる山脈

障子あけてやすき心に紺青の山にむかひつ晝
飯を食む

たゞひとりやすき心に飯を食む晝の厨になけ
るこほろぎ

米洗ふわが僧院のうす暗き厨にかなし晝のこ
ほろぎ

うら若き尼僧がひとり秋の茄子つみゐる畫を
啼く雉子かな

ほのじろう硝子障子に朝あけの霧ながらふり
檳散るなり

わくら葉は障子をうてり驚きて心すませど虫
も鳴かざり

山霧に古き疊は濡れにけり蜘蛛そゝ走るとも
しびのもと

わが窓は時雨するなり遠山は日にかゞやけり
夕食をはむ

日沒 終

大正六年八月廿四日印刷
大正六年九月一日發行
定價七十錢

著者 米田雄郎
發行者 東京府豐多摩郡大久保町西大久保二百二十四番地 前田洋三
印刷者 東京市芝區新櫻田町十九番地 岡千代彥
印刷所 自由活版所

大正六年九月
歌集 日沒
不許複製

發行所 東京市外西大久保二二四 白日社出版部 (振替東京二六一六三)

■詩歌叢書■

第一編 野火（歌集） 熊谷武雄著

第二編 波の上（歌集） 金子不泣著

第三編 鳴かぬ鳥（歌集） 田村飛鳥遺著

菊半截天金函入
裝幀高雅を極む
定價各金七十錢
送料不要

東京市外
西大久保
白日社
發行

179
147

終